支倉徒然
はせくらつれづれ

～ セピア色の風景 ～

「風呂」

青田　茂雄
仙台建設業協会専務理事

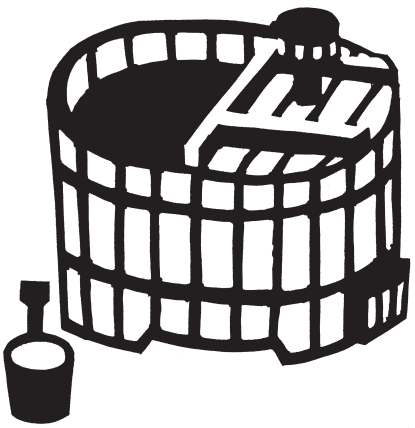
わが実家の風呂は、五右衛門風呂でした。その風呂場は、年寄りが行き来に楽なように、隠居屋に併設したものでした。

風呂に入るのが楽でも、早寝の年寄りにとっては、その後母屋から入浴にまばらにやってくる孫たちの音・騒ぎは安眠を妨害するものだったと思います。事実、風呂場での遊びや、お湯がぬるいための追い焚き騒動のときは、しばしば怒鳴られたものでした。

五右衛門風呂は、まさに大きな鉄鍋そのもので、薪をくべる口から奥をのぞくと、丸い鍋底が見えました。かまどの鍋で煮炊きするように下から火を燃やすと、まず背中が当たる鉄の壁が熱くなり、温まった水は壁に沿って物理の法則通り上にたまるため、よくかき混ぜないで入ると、中がまだ水だったりしました。

また、釜（鍋）底には、すのこ状の底板があり、風呂釜を洗うときは取り外しました。そこで洗った日に最初に入る人は、その底板を沈める必要があり、体重がなく脚が短い子どもがやるには、相当の苦労があり怖いことで、しばし湯中に浮かぶ底板から滑り落ち、熱い釜底に直接足が触れ、飛び出したものでした。

見上げれば風呂場の天井脇に、外気筒抜けの格子状の湯気抜き穴があり、時に月が見えたりして、子どもながらも、電気を消して鉄分たっぷりの湯に浸りながら、月見情緒を味わったりしたものでした。



月見酒などを覚えるずーっと、ずーっと前のことです。

●あおた・しげお　1956年生まれ。福島県相馬市出身。2016年5月から仙台建設業協会の専務理事を務める